

## その他

お母さん！ 生きていて良かったね  
“ある国際結婚の悲劇”

大分県 石丸 麗子

一 奇跡の再会そして開眼

「万歳！ 万歳！ 見えた、見えた！」という喜びの声が、ここ大分県立病院眼科治療室から沸き上がってきた。

「旧満州で離別の母娘、半世紀ぶりに奇跡の再会そして帰国」という見出しで、平成七（一九九五）年八月のある日の読売新聞紙上で報道され、人々の関心を集めた親子は、今度は全盲だった母

の目が、十五年ぶりに見えるようになったと、狂喜乱舞して抱き合い嬉し涙を流していた。母は四十歳代の当時、既に緑内障を患っていたが、その後さらに白内障も併発して両眼共に病状は悪化し、絶望的な状態にあった。

南米のボリビア、そしてアルゼンチンで手術を受けていたが、結果は思わしくなく、機会があったらもう一度手術をしようと考えていたが、三度目は危険だからと医者から断られていた。しかし、再会後その苦しみ、悩みを知った私は何とかもう一度、母の目に光を取り戻せぬものだろうかと考えて、ここ県立病院を訪れた。

事情を知った担当医は眼科部長と相談したが、眼科部長も手術の難しさは承知していた。しか

し、「やるだけのことはやってみましょう！」と決断した。私たちは、「お任せします。よろしくお願ひします」と、頭を下げて手術の日を待った。

そして、神に母娘の願ひが届いたのか、手術三日目に母は、奇跡的に光を取り戻したのだった（右眼0・07）。離別以来、初めて娘の顔を見た母は、「違う！ 違う！」と、首を振っていた。それもそのはず、別れた当時、十九歳だった娘は、今は一足飛びに六十八歳の白髪混じりの熟女になっていたのだから。だが同時に母のその言葉に病室は歓喜の声で埋まっていた。

「目が見える！」ということとは、何と素晴らしきことであろうか？ 狂喜乱舞とは、あの瞬間の状況のことを言うのではなからうかと思つた。用事があつて市内に出た私は、通りすがりの何のかわりの無い人たちにも、「私の母さんの目が見えたのよ！」と言つて、叫んで走り回りたい衝動にかられていたが、それはようやくの思いでこ

えた。もちろん、母娘再会のと看から関心を持つていた、読売新聞社と、私たちのことを我がことの如くに心配してくれた人たちには、この朗報をすぐに伝えた。一週間経つたころには眼帯もとれて、看護婦さんに手を引かれた母は、病棟内の散歩を始めていた。

以前から母のあだ名は、「Si<sup>シイ</sup>ちゃん」と呼ばれていたが、そのいわれは、だれかに声を掛けられると使い慣れたスペイン語で、「Si」（日本語でハイという意味）と返事をするところからであつた。

入院してからまだ日の浅いある日のこと、私がちよつと席を外したときに夜勤の看護婦さんに、「変わりありませんか？」と声を掛けられたので、「Si！」と返事をした母は、早速に看護婦さんに起こされて便所に連れて行かれた。母はすぐには事情が飲み込めなかつたが、あとで間違ひであつたことが分かつてナースステーションで大笑いになり、後々までの語り草になつた。それから

「Siちゃん」の愛称で呼ばれた母は、有名になり皆さんにかわいがられていた。

若いときにはすらつとしていて背も高く、美しかった母も、今では八十六歳の老婆となり、背中也醜く湾曲してしまい、歩き方も幼児のようによちよちで、頼り無い歩き方となっていた。そんな母を見ていると抱きしめたくなくなるようにとおしさにかられて、私は胸が締め付けられてくる。私が誇りに思うのは、外観ではなく母の持っている人間的な美しさである。

苦難の連続であり、数奇な運命であったにもかかわらず、その人柄には暗さや、惨めさが全然見受けられず、常にその表情は爽やかで明るく、まるで童女のようなのである。しかし本人は、鏡で自分の顔を久しぶりに見たときには、熊本弁を交えた日本語で、「べっぴんじゃないけれど、どうろこうのお猿さんよりかはいいよね!」と、笑っていたものだった。

## 二 流転の悲劇

昭和二十一（一九四六）年三月、牡丹江<sup>ポダンコウ</sup>で私たちと離別した後、母の昭和三十三年までの十二年間に及ぶハルビンでの生活は、貧乏のどん底にあつて一番苦しかったようだ。老いた両親を抱えた母は、仕事も金も無く、あるときには自分の血を売ることもあつたが、そのうちにそれさえも断られ、一片のパンさえ手元に無い日もあつたとのことだった。

敗戦で日本人が引き揚げた後に、共産主義政府となつた中国では、白系ロシア人に対する扱いが厳しくなり、ある者は捕らえられて獄中に入れられたし、また、ある者は、シベリアやカナダ、オーストラリア、アメリカ、南米にとそれぞれ追放されていった。

秋林<sup>チユウリン</sup>のビール工場や、飯店での下働きでやつと最低生活をしていた母も、このままでは将来に対する希望も無くなるので、世界教会協議会の援助によつて家族とも別れて、南米のボリビアに

渡った。当時はビザ発給や、入国手続きは嚴重であつて、健康や、年齢に関する審査が非常に厳しく、しかも、長い日時を要していた。

殊に母は、日本国籍で離婚したままであつたので、白系ロシア人であると証明するものも無く審査が困難を極めたそうだ。

昭和三十五年、南米ポリビアから今度は、雇い主のユダヤ人家族と一緒にアルゼンチンに移住した。三年後、そこで同じハルビンスキーの、ハルビン工業学校卒業の建築士である亡命ロシア人と再婚し、教会に移り共稼ぎのような形で働いていたが、昭和五十六年に再婚相手の夫が糖尿病で死んでしまった。

再び一人となつたが、そのころには既に視力も衰えてきて、生活していくことが困難となつたので、妹夫婦を頼つてブラジルに移つた。結局他に行く当ての無い母は、ただ、ただ忍従の十五年間を送つていたが、一番頼りとしていた妹は、平成六年の九月に癌で亡くなつてしまった。

幼いときからロシア、朝鮮、満州、南米、そして最後の地日本と、浮き草のように、ただお人好しだけが取り柄の母にとつては、あまりにも過酷な時代の波に押し流されながらの流転の生涯であつた。私ならとてもではなく、耐えられないことであり、恐らくは精神的な打撃で頭が狂つてしまふか、または、自ら死を選ぶかしたであろう。

幸せであつたはずの敗戦までの満州での生活でも、気難しかった日本人の姑と、酒が好きであり家庭的な人ではなかつた夫に任せ、そのうえに当時の我が家には内地から父を頼つて来る親類や、浪人者が年中居候していたのだから、その気苦労は推して知るべきである。本当に苦労と共に生きてきた母だつた。

五十数年ぶりに日本式の風呂にゆつくりと入つた母は、とても満足気な顔をしていた。ブラジルではシャワーか、バケツ一杯の湯をもらうのがやつとのことだつたそうだ。母からその話を聞くと、どんなにつらかつたことだろうと思ひ、私も

涙がこぼれて致し方なかった。

犬や猫が嫌いだと言う母にその理由を尋ねたら、犬は人の靴をどこかに持って行ってしまおうし、人にかみつくし、猫は食事中にお皿に盛ったご馳走を素早く横取りして食べてしまうからだそう。どの理由にも、目が見えぬゆえに、健康な人よりも数倍も多かった苦労が切実に表されている話だった。

そのような悲しい、悲しいたくさんの思い出も、過去のこととなつたし、日本にいる娘の元にも身を寄せてきた母は、口を開くたびに、「地獄から極楽に来たのと同じだ!」と、嬉しげにつぶやくのだった。よく食べ、よく眠るようになった。天下太平で、どちらかという極楽とんぼである私の夫とは大の仲良しとなった。

一日は母のすっかりした日本語での、「お早うございます」から必ず始まり、それに答える夫の発音も怪しいロシア語での、「ダブルウトラ」というあいさつで大笑いとなって、和やかな雰囲気

での朝食が始まる。「お母さん、これは体に良いですよ」と言つて食卓に並べてあるものを一つ一つ説明して、何でも食べさせようとする夫に対して、母は「これは体に良いですよ!」と言つて、我が家の愛犬リキに食べさせていた。これは完全に夫の負けだった。

このように明るくユーモラスな母が、家族の一員に加わつたことで我が家には笑い声が絶えず、幸せで満ちている。しかし、この平和で、明るい母娘が再会するまでには、まことに紆余曲折いろいろな苦労があつたのである。

### 三 国際結婚と破局への道

母は、一九一〇年、日本流で数えれば明治四十三年に生まれた。その数年後にはロマノフ王朝が崩壊し、共産主義革命によって誕生したソビエト政権になったが、政権に対して宗教的に、思想的に相いれない両親に連れられて、大勢のキリスト教信者と共に国境を越え、幾多の苦難の末にやつと安住の地を満州に見いだして亡命してきた白系

ロシア人の一人である。

父は、伝統のある熊本中学校から、大陸雄飛の意気と希望に燃え、当時では難関とされた上海同文書院を目指し勉強に励んだ結果、念願の合格を果たしたが、一通の電報により同じ国策の一貫として設立されていた、対ソ連活動のための人材養成を目的とした、日露協会学校すなわち後の満州国立大学である、ハルビン学院に入学した。蛍雪を積み重ねて大正十三（一九二四）年に卒業、新京の鉄道管理局に就職した。

当時、国際都市として発展しつつあったハルビンには、白系ロシア人をはじめとして欧州各国からの移民も多く、東洋のパリとも呼ばれていた。

異国情緒の華やかな文明文化にすっかり魅せられた、直情径行型の父は、栗色の髪の毛の美しい、まだ幼さが残っている母と熱烈な恋に陥り、親せきや友人など、周囲の猛反対を押し切って昭和元年に結婚した。そして一男一女をもうけた。

一人息子で、かわいらしかった弟の顯は、七歳

のときに列車事故に遭い、父の勤務していた一面坡駅にて死んでしまった。この悲しい出来事を除けば、比較的平穩で、世間的にも恵まれた環境で私は、多感な青春時代を過ごしていた。

まさか、「五族協和」「王道楽土」を目指す楽天地満州の地が戦場と化し、すべての財産や、営々として築きあげた社会的地位を奪われ、それこそ身一つとなり、しかも親と子が、離れ離れにされる運命が待っているようとは、思いもよらないことであった。しかし、悲惨な運命の波は、急に押し寄せてきたのではなく、不気味にもひたひたと音も立てずに近付いていたのであった。戦局が激しくなり、日本が段々と劣勢になってくるにつれて、憲兵の目は国際結婚をしている人々に向けられていた。

私たち家族も同じであった。特に、牡丹江鉄道局という国策上重要な職場に勤務している父には、最も厳しい監視の目が向けられ、どんな事情かは知らないが、昇給がストップさせられ、さら

には、「清島を南の方に転動させよ！」という声もあり、人一倍正義感の強い父は激怒していたことをはっきり覚えていた。酒を飲み荒れ狂う父に、母娘はおびえきっていた。

昭和十八年、大阪の女子医専の受験を間近に控えていた私は、盲腸炎を起こしたが、医者からは単なる食あたりと誤診されて手当が遅れ盲腸炎になり、さらにはそれから、膿胸のうきょうを併発して半年間生死をさまよい歩いた。そんな時期に、長期出張で牡丹江の家に逗留していた伯父は、「麗子が死んだら子供もいなくなるから離婚しろ！」と、父に強く迫ったらしい。この話は私には秘密にされていたが、何となく家の中の空気を感じ取った私は、一心に神棚に向かって祈っている母の姿を見て、「私が死んだら、お母さんがかわいそうだ」と思い、繰り返される手術や、処置にも歯を食いしばって耐えていた。周囲の人の必死の看護のお陰もあって奇跡的に助かった。

やっと退院できたのも束の間、翌年の初夏のこ

ろに、今度は肋膜炎を患って再度、満鉄病院に入院した。重症で歩行もままならぬ状態であったが、八月九日に突如としてソ連軍が参戦し、大軍が国境を越えて侵入してきた。病院内は大混乱となり、挙げ句の果てに強制退院となってしまうた。

侵攻してきたソ連軍による略奪、暴行、強姦、殺人行為は目に余るものがあつた。しかも、同じスラブ民族である母にとっては、身の置き所がなく、悲しくてつらい日々が続いていた。日本人の家族からは、私たち母娘は恨まれ、邪魔者扱いにされていて、何かあつても心から喜んでかくまってはもらえなかつた。

昭和二十一年三月、ハルビンにいる祖母の病状悪化を理由に、妹たちが母を迎えに来た。そのころになると、母はもう夫や、娘と一緒に日本に連れて行つてはもらえぬと覚悟をしていたようだった。夫婦間での話し合いの焦点は、「麗子はどうするか？」ということであつた。母にとって

私は、生甲斐でもあつたのだが、その思いを断ち切つて私を父に託して、「私は、また、来ますから！」という言葉だけを残して、涙ながらに妹たちに連れられて私たちの元から去つて行つた。

私は、「母さんと一緒に、ハルビンのおばあちゃんのところに行きます！」という言葉をついに口から出せなかつた。私は、ただ泣くだけだつた。泣きながら戦争をのろい、そして父を恨んでいた。しかしその気持ちの反面では、半病人である私が、難民化していて異国人とも思える白系ロシア人の社会で暮らすことを恐ろしくも思つていたことは、否定できないことだつた。

母と生き別れて、父のところに残つたことは、果たして正しい判断であつたのかどうかという思いは、日本に無事に引き揚げてからも、いつまでも私の心中にしこりとなつて残つてしまつた。それは、父にも同じことが言えるようであつた。胃癌を患つて、いよいよ死も間近というときに、「仏さんのように優しい母さんだつたのに、済ま

ないことをした」と、幾度となく言つて息を引き取つた。

#### 四 母捜し！ 暗礁に

私は、日本に引き揚げてきてからも母の存在を確かめ、できることならば日本に連れてきて一緒に暮らしたいとの思いを一日も忘れることはなかつたが、現実には混同とした社会情勢の中で、だれでもその日の糧に追われて生きていくことだけで精いっぱいであつた。

中国とも、ソ連とも正式な国交が回復せずに、母を捜す調査は、厚い壁に突き当たつていた。厚生省や、県の援護局に、父と一緒に母の捜索を願う嘆願書を出しに行つたり、中国とソ連の赤十字社や、モスクワの日本大使館、その他いろいろな手掛かりを求めて陳情したし、現地にも行つて捜索を願つた。

昭和三十四年に中国の紅十字社から正式な回答がきた。「残念ですが、該当者はハルビンには在住せず」という内容であつた。さらに、平成六年



十一月には、ロシア赤十字社からも同じく、「該当者は見当たりません」との回答が届いた。私たちはあれだけ努力をしたのにその甲斐も無く、すべて徒労となったのかと落胆し、次はどこを捜せばよいのかと思索していた。

その間、本籍地である熊本の県庁からは、母の戸籍抹消のことについて再三再四の打診があったが、そのつど理由をつけて断っていた。それでも照会がくるので、平成六年十二月に、熊本県知事宛に、「母の死亡の確認が無い限り、子供としては非情な戸籍抹消の認知はできません」という断りの返事を出したが、それ以後は言ってこなくなった。

平成七年は、ちょうど終戦後五十年の節目の年であった。日本国内でも、あの大戦争に関係した世界の各国でも、多彩な記念の行事が行われていた。

三月末に二通の外国郵便が配達されたが、その一通はロシアのグルガン市に在住している石橋満

里子さんからの久方ぶりの便りであり、そしてもう一通は、ブラジルからの便りであった。石橋さんからの便りも、「残念ですが、見付からずに申し訳ありません！」という便りだろうと思い、まづもう一通のブラジルからの便りを開封した。住所らしき番号が並んでいるのを見た瞬間に、私は急に胸騒ぎがして手紙を握りしめて、父の後輩の水田さんの家に大急ぎで車を走らせた。しかし、あいにくと留守であったので、手紙を置いて戻ったが、数時間後に家に水田さんから電話があった。水田さんは上ずった声で、「石丸さん、お母さんはブラジルで生きていらつしやいますよ……」と言った。

青天のへきれきとはこのことをいうのか。「嗚呼！ お母さんが生きていた？」私はただ呆然となって立ちすくんでしまった。そしてやっと気を取り直して、だれかれに言うでもなく、「有り難うございます。有り難うございます！」と繰り返したが、嬉し涙がほほを伝わって流れていた。

今日までどれだけの日数と、多くの方々の手を煩わせたことか？ 感謝で胸が塞がっていた。すくなくてもブラジルに飛んで行きたいという気持ちを押しさえながら、まずはなすべきことを片付けてからと思い、ブラジル行き準備を始めた。

旅券の申請、母を迎え入れるための諸手続き、ブラジルの資料集めなどを始めた。

それ以外に私が責任を持っている仕事も、二、三あったのでまずそれらを片付けることとした。大分県中国残留婦人交流会の会長としての年次報告、さらにもう一つの難問題として八月に予定していた、展示会出品の革工芸の作品の製作がまだ残っていた。

「ブラジルに、母さんを迎えに行きます」という私の便りに対して母からは、「私が、あなたのところに行くことについては、事実上年令のせいでも弱っていますし、それに加えて目が見えず、困難だと思えます。もしできることなら、ご主人と一緒に来て私の生きている間にいろいろと

お話をして、それから今後どうするかということを決めたいと思います。どうぞ、あなたのご家族に神のお恵みがありますように……」という返事がきた。

読売新聞社のリオデジャネイロ支局の記者が、母を訪れて、「娘さんが日本に来て欲しい。お世話したいと言っていますが……？」との質問にも、同じような回答をしていたらしかった。私は、どうしてなのかと胸中不安になっていた。このうえば、ブラジルに行つて時間をかけて説得するのみに、私は単身で出掛ける決心を固めた。帰りには母を世話してくれたポリス叔父さんをお世話になったお礼に日本に招待することにして、三人で帰つて来ますからと夫の承諾をようやく得た。

母の生存のニュースは、既にスクープをしている読売新聞社以外のマスコミには一切固く断っていたにもかかわらず、瞬く間に全国に広がってしまった。私の身边も急に慌ただしくなった。喜びを

伝える電話や手紙、そしてお祝いの品々、さらには直接に訪問して下さる方々の応接に多忙を極めた。そんな中でも一番早く、そしてたくさんの喜びの声を掛けて下さったのは、あの懐かしい満州時代の学友たちであった。「清島さん！ おめでとう。本当に良かったわね」との言葉に、私はただ胸を熱くした。

幸福の女神は、そんな慌ただしい折にも私を助けてくれた。二世の長島さんから、「私の会社には大勢の人がブラジルから働きに来ています。休暇で帰る信頼できる二世の人を紹介しますから、同行してはいかがですか？」との話があった。一番気懸かりになっていたブラジル渡航への助け人が現れ、私は大喜びで早速にお願いした。再三の打ち合わせの結果、出発は六月と決定し、それを目標に諸準備を進めた。ところが、その方の都合で、渡航は七月中旬に延期され少々戸惑ったが、待つしかなかった。

六月二日、夜もまだ明けないころ何気なく胸に

手をやった私は、指先に梅干し大の塊を感じた。「しまった！」と、全身から血の気が引いてしまった。翌日、早速に受診したが間違いなく乳癌で、すぐに入院、手術となった。ブラジル行きの日程も決まっていたので、ブラジルから帰国してからと申し出たが、医師からは、「出発に間に合いませんから」と、手術を急がれた。

周囲の暖かい看護に支えられて、予定通りに出発十日前に退院することができたが、傷口はまだ完全に癒えず、薬持参での出発となった。

重い荷物などは持てない体での独り旅は無理で、主人も同行してくれることになった。結果としては、母の希望通りに夫婦そろってのブラジル行きとなり、内心では嬉しくてならなかった。昔、東洋史の時間に学んだ、「人間万事、塞翁が馬」の言葉が思い出されてならなかった。

七月十五日、成田発の飛行機でブラジルに向かった。五十年ぶりに母に会えると、気持ちのうへでは喜び勇んでいたのだが、さすがに二十四時

間の空の旅は、術後の体にはこたえた。途中、機内でパニック状態になったが、横にならせてもらい危機を脱することができたのは、幸いであつた。

## 五 喜びの再会、そして帰国

サンパウロ空港には滞在中通訳として助けて下さる二世の、新見クリスケーナさんの一家がそろつて出迎えてくれて感激した。

多くの人種のるつぼであるサンパウロ市は、人口約六百万人の南米一の都市で、「治安が良くないから注意するように」と、あらかじめ言われていたので、肌の色の異なる大勢の人たちの中を、おっかなびつくりしながら歩いた。ポリス家は、車で三時間余り掛かる郊外の、アンパロと呼ばれる別荘地で付近に店は一軒も無く、閑静な住宅地にあつた。

叔父とは今までに四回ほど手紙の交換をしていましたし、新聞社からたくさんの写真を届けてもらっていたので違和感も無く、すぐに打ち解け、新見

さんがポルトガル語で通訳してくれた。母との出会いも、お互い案外冷静に受け止めることができ、我が子の顔も見えない母と抱き合つて、喜びの涙を流した。

ブラジル・フォード自動車会社の技術員として、定年まで働いた叔父は、車の故障は音で察知するほどで、社内でも有名な熟練工だったとのこととで、北京の学校時代でも秀才だったようだ。広い三間の居室と、食堂は整然と片付けられていて、叔父の几帳面な性格を物語っていた。下手なことをすると噛みつかれそうな恐ろしい黒毛の犬が四匹と、猫が二匹いて、さらに広い庭の管理などの家事万端を男手一つで行っていた。

愛する妻を失つて日も浅い叔父は、亡き妻を賛美する言葉を一日に幾度となく繰り返し返していた。

私は、新見さんと思わず顔を見合わせるぐらいだった。

母は、広い地下室に住まわっていて、がらんとした空間にベッドと洋服だんす、それに便器があ

り、片側には不用物品が積まれていた。その中で黙ってうずくまっている母を見ることは、つらいことだった。「お母さん！」と言って日に何回か降りて行き、昔話などを聞いたが、初めて義姉の笑い声を耳にしたと、叔父は驚いていた。母との会話は、日本語にとまどきロシア語を交えてのちゃんぽん語だった。母の口から懐かしい熊本弁が飛び出して大笑いしたこともある。再会して三日目に、時機到来とばかりに帰国の話を持ち出した。意外にも母は、何のためらいも無く、「Si！」と答えて皆大喜びをした。

それから出国準備が始まった。外部との交渉は新見さんが主として行ってくれた。しかし、出国ということは想像以上に多くの問題を抱えて、容易はでないことが分かり、私たちにはあ然とするこの連続であった。

ボリビアからアルゼンチンに入国の際には、何か白系ロシア人の入国が許されず、雇い主のユダヤ人が金を使って工作し、母の国籍を偽って移

住したことで、そして再婚の際、アルゼンチンの国籍を手に入れるまでに三年もかかっている。さらに、夫の死後今度は一時渡航の形式でブラジルに来て、そのまま滞在したかっこうになっていて、正規の入国手続きは行われていない。いわゆる不法入国者であったのだ。が、その難関解決も読売新聞社の、「母娘五十年ぶりの再会」の記事が偉力を発揮した。

記事を知ったアルゼンチンの領事館の弁護士も同情し、積極的な協力により何とか短期間で解決した。そして次は入国先の日本総領事館だったが、これは母が日本国籍を所持していたので簡単だと楽観していたが、案に相違して、「再婚している」という理由で待ったがかかった。

次々と起こるこうした難問題と、慣れない異国での生活で、完全に回復していない私に影響を及ぼし、次第に食欲が無くなり苦しい日々が続いた。

そんな折に、福岡の田川記者から、「石丸さ

ん！ どうしていますか？」との国際電話がかかってきた。まさに「地獄で仏に会う」のとおりだった。今の窮状を訴えたところ、田川記者は、直ちに読売新聞社リオデジャネイロ支局に電話をしてくれた。翌日には、「領事館に出頭せよ」ということとなり、今度はこれまでのガラス越し面接ではなく、丁寧に別室に招じ入れられ、領事と直接面会した。

事情を知った領事は、「今、あなたは何を一番にして欲しいですか？」と質問されたのでそれに答えて、「二日も早く母を連れて日本に帰国したい」と答えた。その希望は直ちに受け入れられ、最も早い帰国許可である「渡航書」が発行された。出国手続きは完了したが、帰国予定日が日本のお盆のラッシュ時と重なり、今度は元々のんびりしているブラジルの旅行社との交渉にいら立つ日々となった。

そんな日々の中で慰められたのは、近所に住んでいるイタリア系ブラジル人のバゴット弁護士一

家との交流である。叔父にポルトガル語の特訓を受けていた夫は、そこに出掛けて日本式即席焼きそばの実演をして歓迎された。私と新見さんは、手作りケーキや料理を持って行き、家族全員とにぎやかに踊ったり、食事をしたりして、単調な生活に潤いを与えてもらった。難しかった母の居住証明書を取れたのも、バゴット弁護士のお陰である。

出発の朝は三時に起床し、車を乗り継いでサンパウロに向かった。総領事館での手続きのために一泊し、翌日空港に着いた。空港では不法入国者である母がとがめられる危険もあったが、係官に付き添われた車椅子の母は、居並ぶ大勢の渡航者を尻目に天下ご免とばかりに悠々と関所を通過し、私たち夫婦も大威張りで後に従った。

飛行機の中では、三人共に元気で、今までの出国準備での疲れが一度に出て、よく眠り、よく食べた。ブラジルから日本へ、そして成田、羽田、大分と一気に乗り継ぎ、八月十七日に無事帰郷し

た。

## 六 帰国と、母への思い

だれにも知らせずに帰国をしたが、看護学校時代の上司、同僚、それに大勢の友人たちが空港に迎えに来ていた。母は、大きな美しい花束を二つもいただき、見えないながらも、「女優さんみたいだね!」と、私に嬉しそうな顔を見せた。別府市役所で母の住民登録の手続きをして、直ちに受理された。それは、熊本の市役所戸籍係に連絡を取り、確認がすぐに取れたためである。健康保険証や、老人医療証もいただき、すぐに使えるのとこので、眼の手術のことを考えて取り越し苦労をしていた私は、ほっと安堵した。

家に着いて母にそのことを話したところ、母は、畳に両手をつけて、「清島の家内です。どうぞよろしくお願いします!」と言った。実は、父の後妻である静江母さんも、この家に同居していたので「清島の家内」が二人になったのだった。二人は仲が良く、お互いに優しくいたわり合っ

て過ごしている。

戦後五十年という記念すべき年に帰国した母は、世の中も変わつたが、隣近所の人々からも暖かい目で迎え入れられて幸せであった。厳しいことがあつたが、それを乗り越えてよい時機に帰国できた、いろいろな面で助けていただいた方々に感謝すると共に、私自身も嬉しく、取つた行動には満足している。

現在の幸せも、健康であればこそとお互いに、養生、摂生に留意しているが、私のひそかな心配事は、癌の再発である。夜中にふと目覚めると、「この母を残しては死ねない!」との思いで頭の中がいっぱいになり、眠れなくなってくる。

医師や、友人は生活に張り合いを持たせれば、大丈夫と元氣付けて下さるが、さてどうかとも考える。「先には死ねぬ、先には死ねぬ」と、いつも心に言い聞かせている。

これからも、何事にもくよくよせず、明るく、マイナス思考ではなく、すべてプラス思考

で、万物に対する感謝を忘れずに、しかも謙虚に生きていきたいものと思っている。多くの人々に支えられ、この歳になって老いた母の優しいまなざしに包まれ、共に暮らせることは、何と言っても人生の最高の幸せである。「生きていることの有り難さ」をしみじみと感じている。

## 七 結び

戦争は多くの人々の運命を狂わせたが、私たち家族もそのとおりで、一家離散そして再会という、国際結婚であった両親ゆえにその悲劇は、他の海外からの引揚者の人たちとは多少異なるものであった。

今、私が切実に思うことは、平和の有り難さと、日本人であったことの喜びである。いわゆる亡命者である母の運命を振り返っても、後ろ盾として身の安全を保障してくれる国家が無かったことが、この悲劇の因であり、それがいかに哀れで悲しいことであったか実証している。

母の姉妹五人は、ソ連の対日参戦と共にそれぞれ

れ夫は理由も告げられずに拉致されて、あとには老人と子供たちだけが残された。最も残酷な運命をたどったのは、母のすぐ下の妹である。通訳として働かされていたが、それがかえってあだとなり、中国兵によって市中引き回しのうえ惨殺され、しかも一人娘で西洋人形のようにかわいらしかった五歳の寿子ちゃんは、首を切られて殺された。敗戦のとき牡丹江より避難した際に、一時、鉄嶺と一緒に暮らしたことがあっただけに、母子の死に様の無残なことに私は非常なショックを受けたものだった。

今一つ、母との再会実現に力を貸してくれたのが、ロシアのグルガン市に在住している石橋満里子さんである。平成四年八月に、読売新聞紙上で、「四十七年ぶりに父親と再会」という記事を見た。小学校での後輩だった新宮さんから、「あなたの境遇と似た人が一時帰国していますよ」という連絡を受けた。私はすぐに連絡を取り、グルガン市に戻る直前の石橋さんを、大牟田市に訪ね



て私の事情を話した。

ロシアのノボシビスクに、「ハルビン協会」の本部があり、石橋さんはグルガン支部の副支部長であった。「母親捜しに協力しましょう！」と約束してくれた。読売新聞社福岡支局の田川記者とも、そのとき以来のお付き合いである。ハルビン協会の会報は、全世界に移り住む日系ロシア人に配られていて、アメリカに住んでいる、母の妹が偶然に「母親捜し」の記事を読み、ブラジルの叔父に通報してくれたのが、再会実現の発端であった。

今でも世界のどこかで血生臭い戦争や、テロが繰り返され、銃声は平穏な家庭を脅かしている。そして多くの人々が尊い生命を失い、傷付き、罪の無い幼い子供や女たちが、不幸のどん底であえいでいる。

何故に人類は性懲り無く、戦争を繰り返すのだろうか。これからの日本は、戦争に参加したり、巻き込まれたりせずに平和を絶対に守ってもらい

たいものである。世界の人々は肌の色が違っていても、自分も他人も、同じ地球人として、命を大切に仲良く共存共栄をしたいし、是非とも、そうあってほしいものだ。